

フクニチ新聞 29th. Sep.1976

「汎 世界的空間」の創造を 抽象美術寸孝

色と形の端的な表現 観衆の前に提示、理解される努力も

山内重太郎

<福岡県文化会館(福岡市中央区天神五丁目)で西日本在住の十四人の作家による「多元的抽象展」が開かれている。これは、かつて九州派・洞窟派などで前衛美術運動を推進した山内重太郎氏の企画によるもので、抽象美術の今日的再生を意図した新しい挑戦である。同氏は開催に当たって次のよう述べている。「抽象美術とは、具体的、多元的レアリテの端的な表現である。ここに、抽象美術退潮の中であって、一貫して独自の抽象の道を探求する一群の作家がある。結集して、自ら拓(ひら)きつつある世界を投げ出し、問うこととなった。これは、一つの挑戦であり、自らに対する賭けである」と。この山内重太郎氏の寄稿による抽象美術とは何か?一。>

今日、美術は抽象から自然への時代であるとか、総合の時代であるとか、コンセプチュアル・アート (観念芸術)以後美術はなく美術の時代は終わったという考え方がある。そのいずれにも現代美術のおかれている、難しい状況を反映した認識がある。

このような時代に、一体、抽象美術はいかなる存在理由をもち、いかなる可能性をもっているのか考えてみたい。

美術に於ける抽象の定義については、カンディンスキー、モンドリアンによる抽象主義美術の出現以来、色々の主張があるが、抽象とは、その本質を規定するものではなく、揶揄 (やゆ) 的につけられた、印象派、野獣派、立体派と同じく、第三者的な名称にすぎず、その本質は、具体的なリアリティの描写的、説明的な表現ではなく、色と形による端的な表現としている。

本来、美術作品とは、サイン (ソーニユ、記号、表徴)である。しかし、交通標識や文字等の記号と異なり、その意味する内容は一瞬的でなく、随意的であり、動的である。すなわち、シンボルといってよいであろう。抽象の作家は具体的意味内容を記号として抽象形態の中に閉じ込め表現する。

その記号である作品が、観衆の前に提示された時、観衆は各目の受容能力において、意味内容を汲みとるのである。

抽象美術は、一般にはなじみ難いといわれるが、現代美術としての抽象主義美術の発生は

一世紀にも満たないが、その源流は先史時代にある。例えば、ストーン・サークルやストーン・ヘイジや石製品、土器等である。これらは超越的事象に関する構築物であれ、機能のためのものであれ、自然をかたどってははいない。

古代エジプトのピラミッドは、歴史時代における、最初の巨大な抽象芸術ではなかろうか。十数年前、筆者が茫漠（ぼうぼく）たる砂漠の中に聳（そび）え立つピラミッドを初めて見た時、人類の抽象精神の具現を眼前にして、身内の震える感動を覚えた。後日、ピラミッドは建設当初、磨かれた黒御影石で覆われていたことを知った時、黒いピラミッドが瞬時に脳裏に再現し、いまだに消えないでいる。

先史時代より、具象と併存しながら抽象の流れは連綿と続いているが、枚挙に暇がないほどである。

われわれの周囲をみると、われわれの生活空間の中で、住居、家具、道具、交通機関、機械、衣服に至るまで、随所に抽象形態を発見することができる。それらの装飾としてのデザインには、具象的なものも多いが、抽象的なものも多い。

われわれはこのような生活空間の中で、それらの抽象形態の生活物資や便益を日々、その目的によって、判断し、選択し、享受している。

しかし、それがいったん、抽象美術となると、作品の質にもよるが、難解という理由の下に、敬遠されるのである。だが、作家の側も、作品の内容と方法をもって、理解されるように努力することを惜しんではならない。

かつて、われわれの先人たちは、石の配置による石庭によって宇宙を表現し、無名陶工の無作為の茶わんの中に根源的な美を発見している。これらは高度の抽象美術といえると思う。

第二次大戦前までの抽象美術は「冷たい抽象」と呼ばれ、その硬直化、アカデミズム化への反動として、戦後「熱い抽象」すなわちアンフォルメル、抽象表現主義が台頭し、形骸化した抽象に躍動した生気を吹き込み、抽象全盛の一時期があった。

「熱い抽象」に対するいろいろの評価はあろうが、見落とされてならないのは、この運動によってヨーロッパ的限定空間が打破され、無限空間への地平が拓（ひら）かれたことである。無限空間は東洋思想に培われた、東洋美術の中に古来から存在していたものである。ところが、ごく少数の達識の作家を除いては、認識するものはなく、多くの作家が、明治以来、

